アイヌ語の概要

文責：横山裕之（北海道エスペラント連盟員）
協力：大野徹人（様似町アイヌ生活相談員・様似町社会教育委員）

アイヌは、2008 年に国会で先住民族として認められました。その多くは北海道に在住しています。彼らの固有のことばであるアイヌ語は日本語とは別の言語です。アイヌ語は系統は不明といわれ、従来は文字を使ってませんでしたが、現在では主にカタカナ（一部はアイヌ語音韻用（音節末の子音など）の特殊カタカナ）やローマ字を用いて表記されています。明治時代に入って日本政府は同化政策をとり、学校教育など公的な場面では日本語のみを強要しました。また、一般社会においては、民族差別、蔑視、いじめなどがあり、これらのことからアイヌ語が使えない状況に追い込まれ、しだいに使われなくなりました。

しかし、近年、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」の成立、国連の「先住民族の権利に関する国連宣言」や前述の国会の「アイヌ民族を先住民族として認める国会決議」などによって、アイヌの間に伝統文化の継承の気運が盛り上がっています。

アイヌ語には、祈詞や口承叙事詩や昔話などの伝統文芸があります。財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構主催のアイヌ語弁論大会（イタカンロー）には毎年多くの人が参加し、アイヌ語による弁論や、口承文芸の披露が行われています。また、北海道各地でアイヌ語を学ぶための講座が開かれており、アイヌをはじめとする多くの人が学んでいます。アイヌが比較的多数暮らしている関東地域でもアイヌ語を学ぶ講座が開催され、アイヌの人たちがアイヌ語を学んでいます。北海道の STV ラジオでは、「アイヌ語ラジオ講座」を放送しています。

その他、「アイヌ語ペンクラブ」という任意団体の活動で、四季折々の話やアイヌ語の文字コードの話など、多種多様な内容がアイヌ語で書かれている「アイヌタイムズ」の出版活動もあります。[1] 私も関係者で、第 11 号から第 55 号まで 42 の記事を投稿しましたが、その中でプラハ宣言や北海道エスペラント大会などの 5 つのエスペラントの話も投稿してます。[2]

1） http://www.geocities.jp/otarunay/taimuzu.html
2） http://www.geocities.jp/aynuitak/

1997 年 3 月に創刊され、年に 3~4 回のペースで発行され、2012 年 7 月に第 55 号が発行されています。ご興味のある方は、是非、「アイヌタイムズ」の購読をお願いします。次号発行時には、日本語訳の号も発行され、辞書や文法書を使えばアイヌ語の勉強にもなります。

最近は、読者数も減ってきており、採算ぎりぎりでやっていて経済的に大変苦しい状況となっています。購読料と理事の年会費だけで事業を行っていますので、さらに続けていくには購読者の減少を食い止め、新たに購読者を獲得する必要があります。ご興味のある方は、是非ご購読いただければと思います。また、購読者からの投稿も募集しています。ご購読いただくだけでも大変助かりますが、アイヌ語記事もご投稿いただいて、皆様からも是非アイヌ語復権運動を盛り上げていただければと祈念しております。よろしくお願いいたします。題材、形式、ページ数などは自由です。「アイヌ語協力」という形で編集部がアイヌ語記事の作成に協力することもできますので、是非お気軽に、かつ積極的にご参加いただければと思います。

連絡先は、〒055-0101 北海道平取町二風谷 80-25 萱野志朗（事務局）となっています。私にご連絡いただいても取次ぎます。(私の連絡先：hokkaido_esp_ligo@yahoo.co.jp 等)

1　音韻

アイヌ語は、北海道方言、カラフト方言、千島方言に大きく分けられます。北海道方言は、i, e, a, o, u の 5 母音、p, t, k, s, c, m, n, r, w, y, ‘（声門閉鎖音）, h の 12 子音があります。音節の構造は、子音＋母音（開音節）のほかに、日本語とは異なり、子音＋母音＋子音（閉音節）と子音で終わる音節もあります。

例： sapa「頭」、sak「～がない」、sat「乾く」、pas「走る」、sam「側」、haw「声」

アクセントは、ヨーロッパの多くの言語のような強弱アクセントではなく、高低アクセントの区別があり、その型は方言によって違いがあり、ある程度の法則性があります。

沙流方言におけるアクセントの例： wákka「水」、setá「犬」、pírka「よい」

2　文法

2.1　名詞

名詞には、性、数、格による語形の変化はありません。しかし、身体の部位や位置関係を示す名詞には、概念形と所属形の二つの形式があり、人称変化をします。

例： sik（概念形）「目」、ku=siki（所属形）「私の目」

2.2　動詞

動詞は、主語、目的語の人称に従って人称変化しますが、現在、過去の区別はありません。また、自動詞と他動詞で異なる人称変化をする場合があります。また、単複の区別のある動詞が多いですが、単複は主語の数でなく、動詞が表す動作、出来事の数で区別します。たとえば、1 人が 1 回切る時は、tuye「切る」（単数）を用い、1 人が 2 回以上切ったり、2 人以上が切ったりする時は、tuypa「切る」（複数）を用います。ただし、

数詞で４ぐらいまで主語の数が特定されると、普通、単数形を用います。
例： ku=hopuni「私が起きる」、hopunpa=an「私たちが起きる」
（hopuni: 起きる、自動詞; hopunpa: hopuni の複数形）
k(u)=arpa「私が行く」、paye=an「私たちが行く」
（arpa: 行く、自動詞; paye: arpa の複数形）
ku=kor「私が持つ」、a=kor「私たちが持つ」（kor: 持つ、他動詞 ）

2.3　語の構造
接頭辞、接尾辞の他、合成名詞や抱合によって、長い語となることがあります。
例： sir-kunne-tere（あたり・暗い・待つ）「暗くなるのを待つ」
e-yay-ko-puntek（について・自分・に・喜ぶ）「～を喜ぶ」

2.4　文の構造
日本語と語順は似ていますが、日本語のような格助詞である「が（主語）」、「を（直接目的語）」、「に（間接目的語）」はありません。日本語の「は」に似た助詞はあります。
例： toan kur nerok kam opitta tooka utar korpare.　「あの人が肉全部をあの人達にあげた。」
あの　人　それらの　肉　全部　あの　人達　あげた
tanto anak rataskep tokapipe ne an.　「今日はまぜ煮が昼食になる。」
今日　は　まぜ煮　昼食　なる

2.5　その他
・アイヌ語には標準語のようなものはなく、方言があり、現在もそれぞれの地域でそれぞれの方言が学ばれています。
・アイヌ語が現在日常会話で使われることはほとんどありません。
・アイヌ語を母語として習得して流暢に話せる話者は非常に少ないですが、短文や単語を記憶している人がまだまだいて、現在の日常生活でも使われることはあります。
例：イヤイライケレ（ありがとう）、イタカイ（こんにちは）、イランカラプテ（こんにちは）、ワッカ エンコレ（水をください）、イコロ イサム（お金がない）
・アイヌ語を母語としては失った世代がアイヌ語を学習して、アイヌ語を話したり、儀式でアイヌ語の祈り言葉を唱えたり、口承文芸を語ったりすることのできる人が少しずつ現れています。
・日本全国の地名をアイヌ語で解読できるという説もありますが、本州や四国・九州までアイヌ語で簡単に解析するのは大きな問題をはらんでいます。少なくとも今まで提出されている説の多くはアイヌ語についての不確かな知識に基づいているものが多く、信頼できるものは少なく、せいぜい東北ぐらいまでしかはっきりしたことは分かりません。やはりアイヌ語学的に説得的な立証をしなければ、単なる語呂合わせに終わってしまいます。アイヌ語の文法・語彙について十分理解し地名が地形を反映していることを確認する必要があります。

・2007 年に横浜で開催された世界エスペラント大会で配布したプラハ宣言アイヌ語版について、日本語の遂語（チクゴ）訳を、別添のとおり参考資料としてお配りしております。ご覧いただければ日本語とは語順が近いので、何となくアイヌ語の構造がわかるのではないかと思います。
なお、代表的な日本語との違いについては、説明が重複しますが、次の項目があげられます。
１．アイヌ語は、動詞によって関係する名詞句の項数が決まるので、日本語のように格助詞がなくても意味が通じます。自動詞、他動詞、複他動詞は、動詞ごとに決まってます。
２．動詞の否定辞（somo）は動詞の前におきます。
３．動詞は、三人称や命令形などを除き、人称を示す接辞が、動詞の頭か尾に付きます。

・ご参考までに、アイヌ語をさらに学習するための参考書を記載します。
中川裕、中本ムツ子(2004)『CD エクスプレス アイヌ語』白水社
田村すず子(1997)「アイヌ語」『日本列島の言語』三省堂（言語学大辞典から再収録）
知里真志保(1956)『アイヌ語入門』楡書房
知里真志保(1974)『知里真志保著作集』第 4 巻　平凡社
田村すず子(1996)『アイヌ語沙流方言辞典』草風館（1998 年再版）
中川裕(1995)『アイヌ語千歳方言辞典』草風館
萱野茂(1996)『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂